常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年８月２８日(金)号

◇　「聴く」ということ

先日のことである。ふと肩を見ると、小さな尺取虫がゆっくり歩を進めていた。目にするのは実に久しぶり。子供の頃に見て以来だ。突然、目に飛び込んできたその姿にびっくりしたが、尺取虫の巧みでテンポのよい体の動きに引き込まれ、しばらく目で追った。すぐさま校長室に戻り、そのままパソコンに向かった。

さて、８月上旬に比べると暑さは若干和らいだものの、体育館裏の常東ランドは、早朝からツクツクボウシの蝉の声真っ盛りである。山全体のあちらこちらから聞こえてくる蝉の声。その全体の音を聞いているのではなく、一匹のツクツクボウシの鳴き声に耳を傾け、追い続けていることに気づく。蝉との距離の遠近、蝉の鳴き声の大小、耳に入る鳴き声の波長など、それぞれが少しずつ異なる声色を聞き分け、一匹の鳴き声をちゃんと追える。これは、耳に入ってくる音をぼんやり【聞】いているのではなく、耳を傾けて【聴】いているからできるのだ。

２つの漢字を分解してみよう。共通点は【聞】と【聴】に「耳」があること。「耳」は漢字の意味を表す「意符」で、いずれも会意文字であることが分かる。

それでは、【聴】についての分析　その①。
【聞】との違いは【聴】には【心】があること。つまり、心に残しながら、心に留め置きながら、心に響かせながら【きく】とも捉えられる。さらに心の上には十四があり、【十四の心】で耳を通して【きく】のが【聴】。
「十四の心を考えなさい」と、高校時代に現代国語教師のネタ話で話をきいた。話が自分の記憶に残っているということは、この時、傾【聴】していたのだろう。

その②。
十四の四を 90 度回転させると目になる。十は加算記号のプラスと読み解く。「【耳】できくとともに【目】から入る情報と併せて（プラスして）【心】に残してきく」。つまり、「【目】と【耳】と【心】できくのが【聴】」なのである。「授業の先生の話を意識して聴きなさい」これは、担任時代に生徒たちに伝えてきた話。あまりに力技で、今となっては、こっ恥ずかしい。努力する立場が逆なのである。

入ってくる音や話を【聞】いたことは、メモに残すなどの作業が加わらないと忘れてしまうことが多いのに対し、【聴】いたことは忘れない。心の有無の差。
人間は、心が動いたときでないと行動に表出しない。本気で動かない。だからこそ、タイムリーな心に沁み入る話で子供たちの心を豊かに醸成しつつ、発見や感動、驚嘆、楽しさに満ちた授業で子供の学びを支援していく必要があるのだ。

ちなみに尺取虫は、人が指で距離を測るように「動きで距離を測る虫」が名前の由来。英語では「インチ（長さの単位）ワーム」。別の言語圏において同様の考え方で命名されているのだ。「なるほど、納得」と心を動かされた。もう忘れまい。

それにしても、尺取虫の成虫が空を舞う蛾とは。外見も動きも大変身である。